

「あいまいさ」をいかに抱きしめるか ——ジョン・ダワー著『敗北を抱きしめて』と 〈戦後日米関係〉の影——

戸邊 秀明

はじめに

1. ダワーの問題意識と記述の戦略

——「日本の読者へ」・「序」を読む

2. embracing の多義性——ダワー史学の妙味

3. embracing の曖昧さについて

4. 〈戦後・日米・関係〉という問題領域

おわりに

これは歴史学のことでなく、私の専門の畑の話ですが、むかし日本で、堂々たる中国文学研究の学術雑誌が出ていたことがありました。その雑誌に、堂々たる学術論文を漢文で書いてある。それを見て、魯迅が、疑問を発したことがある——あれは誰に読ませるつもりなのか。(竹内好「若い友への手紙 VII 歴史家への注文」1952年、『竹内好全集』6、筑摩書房、1980年、p.73)

われわれはこの書物から日本を感じる以上にアメリカを感じる。その意味でこの書物は翻訳に値するものだ(鶴見良行「〈書評〉E・O・ライシャワー『太平洋の彼岸 日米関係の史的検討』」1958年、『鶴見良行著作集1 出発』みすず書房、1999年、p.243)

はじめに

歴史研究者でさえ、グローバル化に言及しない日がなくなった今日、どのような言語で歴史

を書いたとしても、もはや読者を一律に想定して書くことはできない。歴史を記述する者には、ますます多様な読者に向けた周到な配慮が必要とされ、複雑な事象や言語化の難しい情動の諸相を描き出す感受性と構想力が求められている。それは日本で日本人として日本史を研究していると自認する者にとっても、もはや避けられない要請といえよう。本稿では、この要請への応答を、1冊の本を読むことを通じて模索してみたい。

英文原書670頁余、日本語版では上下2巻960頁にもなる学術書が、1999年の発刊以来(日本語版刊行は2001年)、なぜ広範囲からの言及と批評を生んでいるのだろうか——米国による占領下の日本を総合的に叙述した歴史書、ジョン・ダワー著『敗北を抱きしめて——第二次大戦後の日本人』(三浦陽一・高杉忠明・田代泰子訳、岩波書店、原題 *Embracing Defeat: Japan in the Wake of World War II*, The New Press) は、ピューリッツァー賞をはじめ、数々の賞に輝き、日本でも朝日新聞社が主催する第1回大佛次郎論壇賞の特別賞を受けている。もっとも、受賞は多くの反響の結果として与えられており、その原因ではない。原著刊行から4年近く経つま

266 「あいまいさ」をいかに抱きしめるか

でのこの間、『敗北を抱きしめて』（以下、本書と略）は、直接の専門となる日本現代史の研究者をはるかにこえて、様々な論者が利用し、またその評価も多様であるとともに、微妙に変化してきた。

こうした現象を考えると、本書は、一般的な書評の形式にとどまらない、より広い文脈での批評と読解を私たち読者に要請しているように思われる。そこで本稿は、歴史研究（とりわけ近現代史）の今後にとり重要な3つのレベルの考察を含むものとなるだろう。

第一は、歴史叙述の方法のレベルである。この書き下ろしの1冊は、それだけで日本の歴史学の生産方法との違いを浮き彫りにするが、それ以上に重要なのは、読者を意識した著者の明確な戦略設定である。本書からは理論的な研究の参照ははっきりとはうかがえないが、どのような仕掛けによって読者を誘うかが綿密に計算されている。本書が縦横に展開する事例の面白さに心を奪われていては、それが見過ごされてしまう。したがって本稿では全体的な筋の展開を跡づけるよりも、ダワーの方法意識にまずこだわってみたい。その際に焦点となるのは、embracing という一語のもつ喚起力である。

第二は、読者との交渉のもとに成立する状況の文脈である。これは書き手にとっては、第一の方法のレベルで意識されるとしても、読まれ批評されることによって、作品は新たな意味を帯びる。このレベルの検討の必要性は、研究者

を越える読者に向けて書かれている本書の戦略に拠るが、それと同時に、本書が読者に複数の「読み」を許容しているからだ。たとえば本書前半における民衆の活写には、多くの日本人が共感を覚え、郷愁すら寄せた。他方、占領軍・米国の占領政策（特に東京裁判）に対するダワーの真摯な批判は、「自虐史観」批判を呼号する日本の論者たちにとっては、恰好の情報源となるだろう。誰であろう、アメリカの高名な「日本史家」さえもこのように批判しているじゃないか、と。こうした読まれ方につきまとう危うさが、どれほど著者の計算通りに収まっているのかはわからない。だが、いずれにせよ、幾通りかの「読み」を示せる複雑さと、ある意味での巧妙さを自覚しないと、本書を読んだとはいえないだろう。本書は、巧みにも「日本人」のすべての読者を唸らせるとともに、「日本人」の誰も満足させないのだ。

先回りしていえば、その巧妙さの最たるものは、本書への批判や共感など、様々な情動の発露によって、読者が、自分を「日本人」であると確認したり、あらためて「日本人」とは誰かとの問いに直面するようにしむける効果である。これまで本書について、「なぜ本書のような作品が日本で書かれなかったのか」との感嘆を何度か聞く機会があった。その言葉には、日本人が書けずになぜ外国人が書いたのか、という反問が言外に込められている。本書を「読む」という行為に自覚的であらざるを得ないのは、

この感嘆が生む認識上の錯誤——すなわち、これは本来は日本人が書くべきだという前提と、本書を日本史として受容したいという欲求——に敏感にならない限り、ダワーもまた前提にしている日本研究、さらにはその「客体にして消費者」として構成される「日本人」という欲望を対象化できないからだ。本稿では、ダワーの叙述の戦略が誘う複数の読み方から、遡って本書の問題点を浮き彫りにしてみよう。

第三は、本書の成立を可能にした〈戦後日米関係〉における知的・政治的な文脈の考察である。すぐ後に述べるように、ダワーは戦争と占領によって形成されたこの文脈へのある重大な挑戦を行っており、それが本書の最大の同時代的意義であるといつてよい。けれども旧来の枠組への挑戦のために著者が依拠する方法は、どれだけその枠組の克服を実現しているだろうか。この問いは、アメリカの日本研究者だけに向けられるのではない。問いは反転して、否応なく〈戦後日米関係〉の影のもとにあった日本の諸科学にも差し向けられる。本稿の後半では、この問いへの暫定的な応答として、〈戦後日米関係〉そのものを新たな批判的考察の領域として開放し、〈関係〉のあり方を規制する文脈を越える志向を打ち出したい。

1. ダワーの問題意識と記述の戦略

——「日本の読者へ」・「序」を読む

本書は全6部17章に、比較的長文の序と

エピローグ、そして詳細な注¹が付されており、文字通り大部の書である。

前半は玉音放送・降伏文書調印、民衆の人生の破壊や混乱に始まり（第1部）、虚脱と絶望を越えて解放された民衆の欲望と文化の諸相（第2部）、そして占領軍の急進的な改革（上からの革命）を民衆が積極的に受けとめた「下からの革命」の息吹が描かれる（第3部）。後半はこの民衆の動向を封じ込めるために占領軍と日本の支配層が複雑な角逐と共同をへて、革命の巻き戻しを行う過程を追う（第4部）。封じ込めの過程を集約的に表現する戦争責任の問題は東京裁判と民衆意識の双方から明らかにされ、責任の回避と民衆の退嬰感覚が指摘される（第5部）。やがて占領経験は朝鮮戦争下の再建と復興を通じて、戦後日本を規定する構造的遺産となる（第6部）。このような概略からでも、本書が質量ともに占領の全体像に迫ろうとした野心的な作品であり、戦争と占領の時代の日本を描いてきたダワー史学の集大成であるとわかるだろう。

ただし本書の豊富な細部の面白さと入念な描き方に感嘆しつつも、本文だけではダワーの問題意識や方法が読みとりにくいのも事実である。そこで「序」と、日本語版に新たに付された「日本の読者へ」とが、ダワー自身の知的

1 ただし、日本語版の注は、原著の注をかなり圧縮して新たに作成されており、文献に関する指摘などいくつかの重要な注が削られている。

268 「あいまいさ」をいかに抱きしめるか

軌跡にかかわらせながら述べているところを参照して本書の志向を確認しておきたい。

1-1 uniqueness の神話に抗して

ダワーが「日本人の敗戦体験」に見出したのは、「日本人が目に見える形で人間らしい、誤りを含んだ、しばしば矛盾したやり方で」、「人間の基本問題に取り組んだ」姿であった（上 p.16）。敗戦と占領の渦中で見せた日本人の人間的普遍性を捉えるという課題は、実は極めて挑戦的な意味をもっている。西洋世界、特にアメリカにおいては、いまだに日本・日本人は西洋の価値観とは相容れない特殊性を持つとの理解が支配的であり、歴史研究においても他の地域については社会・文化の複雑さの分析は当然になっているのに、日本のイメージだけは相変わらず固定されてきたという。しかも、特殊性論は日本のナショナリストたちの文化本質主義と合わせ鏡のような共犯関係を創り出し、互いに uniqueness の神話の膨張に努めてきた。この日本像を覆す梃子が、戦時と戦後をつなぐ占領期の様々な再編成と、それによって引き起こされる混乱と矛盾の複雑な相に求められたのである。

日本人の経験に普遍性を見出すために、ダワーが重視するのは次の二つである。ひとつは、特殊性論が前提とする「日本人」という単一の同一性を解体するべく、常に対象を複数化し、多面的に評価する。第 3～6 部の標題がすべて

複数形になっているように、それぞれの局面を民衆から支配層まで、無名の帰還兵から天皇まで、およそ日本人の一語では括れないさまざまな人々＝複数者（plurals）の経験を描く。しかもダワーは断片的なエピソードの集積ではなく、「みんな」を総合的に捉える視点を模索し、占領の全体像の構築に到る。「みんな」の中核に据えられるのは、「民衆意識」である。民衆の動態を「下から」（from below）／「内側から」（from within）読みとり、その感情にまで迫ろうとする。またこうした複数化の視点はアメリカの側にも適用され、さまざまなアメリカとさまざまな日本による複数の交差・混淆が起こったことが示される。

もうひとつは、占領を「流動的で、自由で、開放的で、新たな権威のありかた、新たな行動の規範がまだ形成の途上にある稀有の瞬間であった」（上 p.143）というように、「瞬間」「かつてないチャンス」「再出発の好機」と捉える視点である。占領期という時間よりも、むしろ占領空間としての設定がある。これは政治史的な記述に典型的な一方向に流れる時間に基づいた記述では表しにくい事象の複雑さや矛盾を描くために必要なだけでなく、人間の原初的な可能性のすべてが試された場として把握したいからだろう。奇跡的な瞬間としての占領、これはダワー特有の「日本占領のロマン化」でもある。これを文字通りに受け取るかどうかで、本書の読み方は大きく異なるだろう。

普遍性の擁護は、日本では西洋基準の押しつけと受けとめられることが多い。しかしダワーと同世代のアメリカのアジア研究者にとって、この課題は切実である。彼らは、1960年代後半、「憂慮するアジア研究者たちの委員会」(CCAS)に結集してベトナム戦争に反対し、戦争政策に荷担する従来のアジア研究の厳しい問い直しから学問形成を始めた²。当時の(そして多くの場合いまも)アメリカではアジアは共産主義の侵入を防ぎ近代化させる客体でしかなく、われわれと同じ人間性をもつという理解さえ許容されなかった。したがって、ダワーが本書における日本人の経験をベトナム戦争(現在までのところアメリカにとって唯一の完全な敗北)後のアメリカ人の経験と重ね合わせ、自分たちが向き合ったのと同じ課題、すなわち「平和と民主主義」の追求を、占領下の多くの日本民衆が受けとめ、その後も長く信奉した歴史を評価するのは、著者の知的軌跡からすれば譲れない視点なのである³。

1-2 「あいまいさ」の効用

こうした問題意識の基底には、ダワーの方法的原風景ともいえるべき関心が強く反映している。著者はそれを、「あいまいさ」という一語で言い切る。

最初、近代日本文学(何と森鴎外!)から研学生活を始めた著者にとって、第一の関心は人間の感情・意識にあり、初めから社会科学的な訓練によって自己を形成した研究者とは自ずから距離があった。「敗者の悲惨、混迷、悲観、怨念だけではなく、敗者の希望、回復力、構想、そして夢をとりあげ、そうした敗北した人々の目を通してこの世界を見ることによって学べるものは、まちがいなく多くある」(上p.8)との確信は、そうした複雑性への愛着によって支えられている。占領期に限らず、挿話の域を超えて感情や意識の分析をこれほどまでに組み入れた近現代史研究は、日本ではなかったのではないか。

とりわけ「あいまいさ」への関心が活かされているのは、言葉についての分析である。詩・歌謡に限らずスローガンや流行語、見逃しがちな術語などの占領期特有の意味を探り出し、そこに人々の感情や欲望の複雑な反映を見る。標題が「言葉の架け橋」との章もあるように、言葉は人間の意志をそのまま書き記した道具としては捉えられない。言葉はいったん生まれると社会の変化によって次々と意味を変じ、その時々固有の力を持つ。言葉が人を規制し、多

2 彼らCCAS世代に関しては、その時代状況まで含めて、以下が参考になる。小林弘二『対話と断絶——アメリカ知識人と現代アジア』(筑摩書房、1981年)、金原左門『「近代化」論の展開と歴史叙述——政治変動下のひとつの史学史』(中央大学出版部、2000年)、梅森直之『解説「シカゴ学派」と『水戸イデオロギー』』(J. ヴィクター・コシュマン『水戸イデオロギー——徳川後期の言説・改革・叛乱』ベリカン社、1998年)。

3 本書が、ハワード・B・ションバーガーに捧げられていることに充分注意するべきだろう。著者より年少で、アメリカの現状に批判的なこの占領史研究者は、惜しくも急逝した。ダワーは、彼を「平和と民主主義。その理想をけっして見失わなかった」と形容する。ションバーガーの『占領 1945-1952——戦後日本をつくりあげた8人のアメリカ人』(宮崎章訳、時事通信社、1994年)は、占領史にかかわったアメリカ人の列伝の形式をとっているが、その関心は本書と極めて親和的である。

270 「あいまいさ」をいかに抱きしめるか

義性が政治的意志を隠し、あるいは明るみに出す。言葉への鋭敏な感性は、造語の才としても発揮され、今後多くの議論を呼び、なかばは学界の共通語と化すであろう程の卓抜な喚起力ある造語の数々が生み出された。叙述に難解なところはないが、各所で与えられる評価は事象の複雑さに見合っていて、皮肉が効き、ときには矛盾するものの、それこそが人間性に共通する真の姿だと考えられているようだ。

また多様な表象に関する巧みな読解と連関の発見は、写真や漫画の挿入で効果を発揮している。占領軍の収集した写真と日本人写真家の撮影分を組み合わせ、数行のキャプションで新たな意味を引き出す。

こうした独特の方法を駆使する著者にとっては、三面記事のような事件、風俗・犯罪記事でさえ、貴重な資料となる。クロニクル・資料集など多くの二次文献を縦横に用いながら、清らかな意味づけを行い、雑多な事例を総合化できたのも、こうした感性があればこそである。本書が多くの読者に迎えられたのも、読者を獲得するための戦略が先にあったためというよりも、むしろアメリカにおける日本像や、歴史研究における「あいまいさ」に対する鈍感さに挑戦するという目的が、読者の抱いていた自明性を壊す力があったからであろう。

2. embracing の多義性——ダワー史学の妙味

本書の最重要の術語は、標題にもある embracing である。ただしこの語はダワー自身述べている通り、多方向に読者の想像力を喚起する半面、きわめて多義的かつ曖昧な部分を含み、社会科学における理論・概念と同列に扱われるものではない。実際、幾通りもの訳が可能であり、しばしば意識（必ずしも辞書的な訳にあてはまらない）を必要とする内容が盛り込まれている。その意味では、この言葉の不安定さ自体、「あいまいさ」の効果が最大限発揮されている例だろう。しかし本書の最大の貢献は、「みんな」の経験と意味をつなぎ、連関を示唆する強い力を持つ、この一語の導入にこそある。ここでは、embracing という語の導入の効果から読みとれるいくつかの位相を手短に確認したい。

2-1 談合・交配・和解

——日米権力批判としての embracing

本書に対する言及の中でもっとも注目された embracing が、この用法である。大方の現代史研究者にとって得心がいき印象的なだけでなく、日米関係に批判的な知識人によってよく引用されるようになった。

占領下における天皇・日本政府と占領軍の癒着、沖縄の軍事基地化や日米安保条約に象徴される日米合作による戦後の出発という主題は、これまでも折々に指摘されており、こと新しい論点ではない。本書の画期性は、その合作がど

のような範囲にわたり、いかなる結果を生んだかについて、一貫した見通しと周到な目配りによって総合的に叙述して見せた点にある。

本書後半（下巻第4～6部）は、政治・法・メディア・経済にわたって日米の権力がどのような駆け引きを重ね、新しい支配のかたちを生み出していったかを明らかにする。その支配の形式は、占領軍の初期の目的である「民主化」が、占領空間のなかで屈折していく過程でもある。第4部を、「さまざまな民主主義」と題したように、占領軍とりわけマッカーサーと昭和天皇の利害の一致により推進される昭和天皇の免責と天皇制の存続、新憲法の制定における占領軍の強圧と日本政府による翻訳時の恣意的解釈（日本化）、占領軍の巧妙な検閲システムとメディアの反応などを、著者は「天皇制民主主義」「憲法民主主義」「検閲民主主義」と呼ぶ。また「勝者の裁き」と「敗者の裁き」の合作は、天皇訴追回避と陸軍軍部への責任集中・切り捨てによって、日米の和解への地均しとなる。最後に経済の再編が「非軍事化」目標から復興と成長へと修正され、朝鮮戦争のさなか、日本の資本主義は異例の官僚的権威主義のもとで運営されるようになった。

ここから明らかになるのは、一方で経済成長を誇り、他方でその特殊性を指摘されてきた戦後の「日本モデル」とは、実際には「日本とアメリカの交配モデル（a hybrid Japanese-American model）」であり、SCAPanese model という辛辣

な造語⁴に象徴されるように、相互の分かれがたしい合力と癒着の末に生まれたことである。

「憲法民主主義」に現れるように、ニューデューラーの情熱によって生まれた憲法草案が、日本人の憲法構想の伝統を参考にして生まれ、また草案を熱烈に歓迎するだけでなく社会権の挿入など「日本化」で重要な貢献を果たした人々をもダワーは視野に収めており、ここにも複数のアメリカと複数の日本との embracing が見られた。だが、基調は「交配モデル」を支配的形式とする戦後の出発であった。しかも合作により再編成されたシステムは、占領の終了と同時にその出生の秘密が日米ともに忘却され、日本は特異で不変という単一のイメージが維持された。

日米権力の embracing を塗り重ねて、著者はアメリカの日本研究のなかでももっとも厳しい昭和天皇批判＝アメリカ帝国主義批判を実現している。アメリカに対しては、占領軍を民主主義の擁護者とする独善的な固定観念を粉砕し、日本特殊性論が没歴史的であるだけでなく、「交配モデル」の存在を忘却の淵に追いやった捏造に過ぎないことを暴露する。他方、日本に対しては、昭和天皇に象徴される戦前と戦後の連続性が、占領権力との隠微な談合と交配によるとし、キメラのような合成体の存立根拠

4 ただし SCAPanese という言葉自体はダワーの造語ではなく、占領下で征服者の言語をまねた混成英語を指して使われた蔑称である。言葉の由来そのものが embracing のいくつかの位相を経由している。

272 「あいまいさ」をいかに抱きしめるか

を問いたです。後者については、著者はすでに吉田茂の政治的伝記（『吉田茂とその時代』大窪憲二訳、TBSブリタニカ、1981年、原題 *Empire and Aftermath*, Harvard University Press, 1979）において日本保守主義の連続性を描いているが、本書では昭和天皇を真正面から取り上げて、戦後日本権力の出発点の構造をさらに深く掘り下げている。

こうした冷徹な政治力学の分析は、単なる学問的関心からは生まれない。前述のようにCCAS世代の一人として出発したダワーにとって、日本研究とは第二次大戦後のアメリカの新植民地主義、帝国主義の発動を批判的に究明する課題と表裏一体だった。占領を描ききること、ダワーは昭和天皇とマッカーサーに体现される日米権力の合作をさまざまな側面から浮かびあがらせ、二つの帝国主義を刺し貫く批判の観点を確立したのである。

2-2 領有と交渉

——民衆への愛着／呼びかけとしての

embracing

前項ほど実際には注目を集めていないのが、この位相である。しかし、日本語版の標題の「抱きしめて」からくる語感が、むしろこちらを強く想起させるように、ダワーは特に本書前半を費やして、民衆がどのように敗戦と占領を受けとめたかを論じている。

embracing は受容とも訳せる。しかし、本書

に描かれた民衆像には「抱きしめる」という積極性・能動性を込めた訳がふさわしいだろう。敗戦とともに人々は絶望や虚脱に陥るが、すぐさま新しい生き方、さらには「よい社会」の可能性に向けて行動を開始する。また権威の崩壊と改革の号令によって解放された人々の欲求は、占領期特有の文化を生んだ。周辺の集団、一般には貶められた存在である人々のなかに、ダワーは対抗文化を見出し、「敗北の文化」を造形する。その典型として、売春婦、闇市、カストリ文化のそれぞれについて、入念に記述される。本書の前半（上巻）を評価する論者にとってもっとも印象に残り、かつ興味深い記述はこのあたりであろう。

民衆による敗戦・占領経験の「抱きしめ方」をさらに換言すれば、勝者の文化や戦時期の経験を自分たちが利用しやすいものに変形し、解釈し直していく「流用」や「領有」(appropriation)であり、日米の権力との「交渉」を通じて、勝者の文化を飼い慣らす力であるともいえよう。

「領有」と「交渉」の痕跡は、子どもの遊びから「平和と民主主義」という価値観へのコミットメントにまで及ぶ。矛盾や混乱を含む諸相を描きこむことを通じて、ダワーは民衆への愛着を表すとともに、戦後日本における「平和と民主主義」への根強い支持に共感を惜しまない。同時に、その価値観が翳りを帯びつつある日本の現状を批判し、占領経験の意義を顧みるようにと呼びかけているのである。

「民衆意識」への親近感と積極的評価をもつとも効果的に表現しているのは、加藤悦郎と渡辺清を描いた箇所であろう。おそらく一部の文化史家、思想史家以外には無名のこの二人に注目したことにまずは驚く。二人のテキスト（加藤の風刺漫画、渡辺の日記）への犀利な読解は言うまでもないが、本書でそれがどこに組み込まれているかをみれば、ダワーが彼らの思想的営為をいかに高く評価しているかがわかるだろう。加藤は第2章で吉田茂に対置されているが、ダワーはこの風刺画家の戦後の世相に対する観察の正確さを、吉田の戦後改革に対する恐怖感と対比するだけでなく、加藤と吉田が、日本に民主主義が根付くことに懐疑的である点では、実は共通していたと指摘し、占領開始にあたって「上からの革命」を受け取ろうとする試みの困難をいち早く暗示する。他方、渡辺については、第11章で昭和天皇・宮中が戦争責任を回避するのに必死になっている過程に重ね合わせるようにして、1節丸ごとを彼の日記の紹介と分析に当てている。本書の後半は前半と対照的に政治過程や制度の問題に多くが割かれ、挙げられる個人名もぐっと押さえられるが、そのなかで全巻を通じても異例なほどの分量で、この一青年の心理における「天皇制という魔術からの解放」の道程を丁寧に跡づけている。11章末尾に引かれた渡辺の日記の一節、「私は、これでアナタ〔昭和天皇—戸邊注〕にはもうなんの借りもありません」は、「革命」を巻

き戻す流れのうちに、著者がその流れをせき止めるようにしておいた重要な仕掛けである⁵。

「上からの（反）革命」の渦中でも、敗戦・占領から新しい生への可能性を抱きしめた人々がいたことを、著者は見逃していない。

もっとも、こうした読み方は一面的だろう。人々の活力ある言動について目が奪われがちだが、ダワーは、肯定的に「占領を抱きしめ」る民衆ばかりを描いてはいない。民衆が抱きしめたものは、多様かつ複雑な交配を経たものだった。「勝者が日本に第一歩を印す前に、敗戦は人々の思考や行動を深いところから変えてしまっていた」（上p.10）のである。たとえば第1章や第3章で描かれる引揚者（ダワーはそれをはっきり「難民」と言う）、戦争孤児、戦争未亡人は、占領からは相対的に自律して存在する敗戦の位相を民衆がどう抱え込んだかを体現する。そうした境遇に置かれた人々は、占領を自らの好機として抱きしめるような契機をあらかじめ奪われていた。

民衆の惰性や、公定のイデオロギーへの順応に対する厳しい視線も一貫している。この点についての著者の言及の仕方も注目に値する。

ひとつは、民衆の大勢順応の心理を、日本人

5 著者は「蘭辞」のなかで、渡辺の日記（渡辺清『砕かれた神——ある復員兵の手記』朝日新聞社〔朝日選書〕、1983年）について、その意義を「本書がはじめて紹介し、かつ最も重要な資料」と幾分誇らしげに書いている。なお、さらに付け加えるならば、帰郷した渡辺の生還を、敗残兵という後ろめたさを度外視して無条件に肯定してくれたのが、近隣の在日朝鮮人ただ一人であったことも、彼は日記に書き留めている。ここに別様の「敗北の抱きしめ方」が在る（同p.61-62参照）。

274 「あいまいさ」をいかに抱きしめるか

の固有性に解消しない点である。メディアの権力への追従や民衆の大勢順応は、占領軍の支配方式（間接統治や巧妙な検閲方法）によって植え付けられたもので、それを占領後に、欧米が日本人の特性として捉えるようになったに過ぎない。他方で「文化」や「新生」という表現は、占領期特有というよりは、実は戦時中から多用されていた昔なじみの言葉を転用した観念だった。

もうひとつは、民衆意識への批判が、日本社会が戦争責任・戦後責任を回避して戦後を始めたことについての問いかけとも結びついていく点である。旧植民地人民は敗戦後の日本では「見えない」存在とされ、戦前にもまして人権を蔑ろにされた。それは日米による政策の結果にとどまらず、民衆の意識にもかかわる責任であると著者は随所で指摘している。

こうした民衆像の複数性＝「あいまいさ」の緻密な叙述から私が直感的に想起するのは、（唐突かも知れないが）昭和史論争である。1955 年末に刊行されベストセラーとなった遠山茂樹・藤原彰・今井清一『昭和史』（岩波書店（新書））は、ダワーの本書に先立つこと半世紀近く前に戦争と占領を描こうとしたものとも初期の試みである。『昭和史』をめぐる論争のなかでも、特に根本的な批判を加えた松澤弘陽は、『昭和史』における「国民」概念が、支配階級を「非国民」として措定するとともに、戦争の責任を主体的に受けとめる「国民」の可

能性をも「非国民」へと放擲してしまったと鋭く批判した⁶。対してダワーが描く民衆は、『昭和史』の「国民」にはありえなかった相貌をもって私たちに迫ってくる。彼らの姿は、私たちが読者が郷愁を寄せられるほど快いものではない。

2.3 ささまざまな抱擁

——性と権力の絡まり合いとしての

embracing

明晰さを求める読者は、権力者の談合・和解の物語と、民衆の独自の領有の試みとを、embracing の一語で説明しようとする著者の論法に、違和感や躊躇を覚えるだろう。しかしダワーにとっては、「これこそ適切なタイトルなのである」（上xiv）。

embracing の多義性は、そのまま本書の各所に断片として放置されているのではない。これまで見た embracing の諸相を架橋する抽象化されたレベルが必要となる。それが「抱擁」と訳される性的隠喩の位相である。「抱擁」は売春婦と占領軍兵士との文字通りの抱擁から、「アメリカ人の征服者たちの、ほとんど肉体の感觸を楽しむかのようなきつい抱擁」（上p5）とい

6 松澤弘陽「〈書評〉『昭和史 新版』（『思想』424、1959年10月）。今日では、この「国民」の再定義からは、その10年前まで強制的に「国民」にさせられていた植民地人民も放擲されてしまっていた点もより強調しなければならない。松澤の書評は、戦後日本の国民概念の軌跡を見る際には逃しえない凝縮された作品である。この文獻については、酒井直樹「日本史と歴史的责任——戦後歴史学を総括するために」（歴史と方法編集委員会編『歴史と方法4 帝国と国民国家』青木書店、2000年）の示唆によって、あらためてその重要性を確認した。

うように占領政策の隠喩にまで広く使われ、本書の前半と後半の各々の事象を貫く占領下の力学が浮かびあがる。

占領空間では、性的隠喩によって表象と権力を結びつける技術が発達した。そうした現象は、民衆の猥雑な隠語の文化の系譜をひくだけでなく、何よりもこの空間が、なお戦時の継続としての暴力の瀰漫した社会であった痕跡といえる。米軍にとって、今までは男性の「猿人間」だった日本人は、か弱い女性として映り、征服者の暴力を覆い隠すべく庇護の対象へと変身させられるのである⁷。

しかも抱擁は、一方的な緊縛ではなく、非対称ではあってもある相互性を前提としている。これによって、天皇や政府による占領改革の「日本化」(飼い慣らし)や、民衆による日本国憲法の積極的受容も同時に視野に収められる。またマッカーサーに宛てた女性からの「あなたの子供を産みたい」式の手紙や、カストリ雑誌の男性読者たちが西洋を女性という性的対象として願望するようになる経緯など、具体的なセクシュアリティが関係する場面でもこの相互性は作用していた。ダワーが日本の社会・民衆にも厳しい眼を向ける以上、「抱擁

は、単に支配・被支配の具現として表象されない。それは私たちが眼を背けたくなるような相互性と多義性を含んで成立しており、そうであるがゆえに embracing をあえて標題に書き込んだのである。

著者のそうした感性は写真の位置付けにも現れている。そのもっとも優れた例は、第4章で本文とは独立に並置された2枚の写真である⁸ (上 pp.163-164)。一方は、戦時中、米戦艦の甲板で、一人の日本人捕虜(男性)が裸体でノミ取りをさせられている様子を見下すように観察している大勢の米軍兵士を写し、画面下方の裸体がいかにみすばらしく見える。他方は、晴着姿で立つ日本人女性のスナップショットを撮ろうと占領軍兵士がカメラをのぞき込みながら取り囲む様子が写る。いずれも視線は米軍兵士(ただしどちらの場合も兵士は白人⁹)の側にあり、権力関係は揺るがないが、戦時・卑小な男性／占領下・美しい女性として日本の表象が激変するさまを凝縮して表現している。後者の写真のキャプションは次のように絵解きしている。「敗北した日本にたいして、征服

8 全く別々に撮られたこの2枚の写真は、原著 (pp.136-137) では見開きの左右頁各上段に配され、一双の屏風のように据えられて新たな文脈を構成している。ただし日本語版では、この2枚は見開きではなく頁の裏表に配されてしまっていて、残念ながらこの対称の効果が再現できていない。

9 本書における「人種」の問題は、今後さらに検討されるべき論点である。本書の写真・図版は73点に及ぶが、黒人兵士が登場するのは上p.31の1点だけである(しかも写真の兵士は太平洋戦域の海軍兵士であり占領軍ではない、またこの写真は黒人兵士のみが写り上p.29の白人兵士のみ写る写真と対照されているようだ)。当時の被写体の割合から来る制約なのか詳細はわからないが、日本人の側の人種主義の問題と合わせて、むしろ研究は今後にかかっているといえる。

7 日本像の激変は、このほかにも幼児への変身などいくつかの型がある。いずれの変化もすでにダワーの『人種偏見』(猿谷要監修・斎藤元一訳、TBSブリタニカ、1987年、原題 *War Without Mercy*, Pantheon Books, 1986、日本語版は『容赦なき戦争』と原題を尊重した改題の上、「9.11」以後に書かれた序文を付した平凡社ライブラリー版が出ている)で概観されていたが、占領下の社会に分け入ってセクシュアリティの位相を分析したのは今回が初めてである。

276 「あいまいさ」をいかに抱きしめるか

者はたちまち性的な眼差しを向けるようになった。以来ずっと、日米関係は複雑に絡み合った男女の演技になぞらえてイメージされるようになる」。

ダワーの叙述は、占領下における「男女の演技」のグロテスクな様子を執拗に描くため、いささか食傷気味になる読者もいるだろう¹⁰。その違和感は一定程度理由のあるところで、妥当性は著者が性的隠喩そのものをどこまで対象化しているかにかかっている（後述）。

2-4 日本における批判的知の系譜との

embracing

embracing の盛り合わせの最後に、ダワーが本論中で明示的に表現してはいないが、本書が実現している重要な embracing を挙げておこう。本書が、異例なほど二次文献から多く引いていることは先にふれたが、二次文献には先行研究も多数含まれている。特に占領史研究の先駆者・袖井林二郎をはじめ、各領域について松浦総三（検閲機構）、古関彰一（新憲法制定過程）、粟屋憲太郎（東京裁判）、吉田裕（昭和天皇免責過程）、吉見義明（民衆意識）等の各々の研究が十分に参照されている。通常、研究者は自己の見解のオリジナリティを主張したくなるものだが、本書では重要な研究と考えれば、そ

れを積極的に紹介する役をも「私の仕事」として引き受けている（上 xxii）

ここには、日本語による批判的な占領史・戦後史研究が、海外でほとんど紹介されていない非対称な状況への著者なりの批判が含意されているとともに、どのような日本の知的系譜との関係から本書ができたかを告白するものとなっている。その意味で本書の注は、本文とは別のかたちで著者の航跡を雄弁に物語る。日米での日本特殊性論の大量生産・大量消費に対して、別の知的関係がありえたことを伝えているからだ。

3. embracing の曖昧さについて

以上のように、embracing という語の「あいまいさ」に込められた多義性によって、本書は見事な語りを実現している。しかしそこには文字通りの曖昧さが難点としてある。ここでは特に、embracing の語の効果を優先させたために、より「あいまいさ」と複雑さへの感受性が求められるような問題の提示が結果的に妨げられている点を3つ挙げておきたい。いずれも今後当該期を叙述する者にとって避けて通れない課題と考えるからであり、それはまたダワーの叙述がどのような関心にそって構成されているのかをも照射するだろう。

3-1 embracing の地政学——空間の曖昧さ

「日本には、人に密閉空間を感じさせる何か

10 岡部敦夫「最近のアメリカでの日本現代史研究——ヤング、ダワー、ビックスの近業を中心に」（『歴史評論』622、2002年2月）p.79。岡部は「この比喩にすくなからぬ違和感をいだき、しいていえばある種の偏見さえかきとる」と率直に書いている。

がある」(上 p.15)。著者はこれに続く箇所、空間が一際閉ざされていたことを根拠に、占領期の経験を日本の特殊性に結びつけるような議論を警戒している。しかし、上記の引用は、まさしく本書に感じる私の印象そのものであり、ダワーの占領空間の描き方の密閉性もしくは閉域性に疑問を持つ。占領を、日米の(それがさまざまであれ)「抱擁」として描くならば、この二者関係のゆえにその空間は閉じられたものと映る。この空間には他者が入る余地はほとんどない。

前述のように、ダワーはこの空間を必死で生きる旧植民地出身者を闇市の風景に書き込み、彼らに対する日本政府・日本社会の対応を批判する。だが、この占領の空間が、その直前まで日本の植民地や占領地であった空間とどのような構造的関係(実態としての交流が途絶していても関係は存在する)にあるのかは関心が払われていない。そのため、日本占領が東アジアにおけるどのような構造転換と連関しているのかわからず、読者としては、戦後＝日米関係の再編という方向に導かれるしかない。それが日本人の関心の推移とちょうど見合っているのだとしても、それでは「密閉空間」を強固にするだけではないか。

第二次大戦後の東アジアでは各地域がそれぞれアメリカと何らかのかたちで embracing する／させられるが、各地域相互は日米のような「抱擁」どころか握手さえできずに、分断や対

立を固定化させられた¹¹。また embracing それ自体のなかに、アメリカによって、抱擁可能な主体であるか、またどのような抱擁が可能であるかの線引きがはさまれていた¹²。ここには東アジアにおける不均等なアメリカニゼーション(民主主義から国家テロリズムまで)、あるいは冷戦期の embracing の地政学とでも言うべき現象が集中的に現れている¹³。アメリカは、東アジアの分断と対立を乗り越えようとする動きについては、その政治的主張の内容如何にかかわらず、反共主義の論理によって徹底的に抑

11 済州島四・三事件をめぐる二人のディアスポラの作家(金石範・金時鐘)の対談をまとめた本の編集にかかわった「唯一の日本人」として、関正則はアメリカの占領による日本と朝鮮半島の戦後の「ねじれ」たつながりについて、次のように言及する。「植民地の解放者は、解放された民ではなく、植民地支配者やその協力者と結託し、冷戦下の新たな支配構造を再編成する。解放者が「解放」したのは、抑圧されてきた人びとではなく、抑圧してきた人びとだったというイロニー。こうした逆説とイロニーが、玄界灘を挟んだ民主主義と暴力のコントラストの陰で、東アジアの戦後に共通する構図として、そのグロテスクな姿を刻印し、対照的な二つの国(日本と南朝鮮―戸邊注)の戦後は、そうした戦前と戦後を結ぶ奇怪な連続性において通底している」(金石範・金時鐘『なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか―済州島四・三事件の記憶と文学』平凡社、2001年、「編集後記」p.301)――この指摘は、本書が描き出す占領空間の死角を言い当てている。

12 各地における embracing (あるいはその不可能性)については、とりあえず『現代思想』29-9、2001年7月臨時増刊「戦後東アジアとアメリカの存在――(ポストコロニアル)状況」を東アジアで考える」を参照。私が特に専門とする沖縄の実態については、鳥山明「地上戦の島の「戦後」――沖縄の米軍基地の成り立ちをめぐる断章」(前掲『現代思想』29-9)、拙稿「沖縄 屈折する自立」(酒井直樹ほか編『岩波講座・近代日本の文化史8 感情・記憶・戦争』岩波書店、2002年)などで読み直しが進められている。もちろん、この問題は狭義の東アジアに限らない。フィリピンや南ベトナムにおけるアメリカの(再)占領とも接続する議論の形成が求められている。

13 なお本稿のもとになる報告をした後に、本書のこの「地政学」の問題にふれた論考として以下が挙げられる。成田龍一(書評)J・ダワー著『敗北を抱きしめて』上下(『年報・日本現代史8 戦後日本の民衆意識と知識人』現代史料出版、2002年)、山之内晴「総力戦体制からグローバリゼーションへ」(山之内晴・酒井直樹編『グローバリゼーション・スタディーズ1 総力戦体制からグローバリゼーションへ』平凡社、2003年)。偶然だが、いずれも私と同様、前掲金石範・金時鐘『なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか』を参照している。

圧した。それは占領空間が、「密閉」と排斥を意図した日米権力の意図を越える様々な人々の移動と運動によって挑戦を受けていたことをも裏書きする。こうした問題への視野を閉ざすならば、日本の戦後史がまずもって帝国後史としてあった厳たる事実が見えにくくなる¹⁴。

アジアの動向を付け加えるということではない。密閉された空間の内部にも、日米の抱擁とは異なる敗戦・占領を抱きしめた経験が存在していたのだから。さまざまな「在日」の人々（当時は沖縄出身者も「在日」を自称した例がある）がそこにいたのだ。占領期の日本共産党における朝鮮人の重要性や、復帰運動の始動において在本土沖縄・奄美出身者が果たした役割を考えても、問題は明らかだ。ところが本書では、彼らが現れても、犯罪や闇市の情景に書き留められる。著者からすれば、そこに現れた活力や主体性に注目したいのだろうし、その解放性に親近感や憧憬さえ寄せているようだ。だが、このような取り上げ方だけでは到底、日米にとって他者なる「領有」を含んだ占領空間における多様な embracing はつかみとれない。「勝者と敗者」（本書第1部の標題）の出会いという設定では、彼らは見えなくなってしまう。

本書は日本帝国の旧植民地・占領地では、あ

るいは「在日」にはどのように読まれるのだろうか。また沖縄ではどのように読めるのか。米軍基地問題や冷戦期の国家テロリズムの再審などをめぐって、こうした地域が互いの経験を共有し、新たな東アジア像を創り出そうとしつつあるいま、ダワーさえ拘束された「密閉空間」からの脱出は、私たちには避けられない課題となっている¹⁵。

3-2 占領史による戦後史の embracing

——時間の曖昧さ

ダワーの描く占領は、どのような時期として位置づけられているのだろうか。総力戦と占領をめぐっては、90年代に日本でも連続／断絶の要素をどう捉えるかで種々の議論があった。またこれと雁行するように、ダワーも論文 *The Useful War*（1990年）で、総力戦による社会の変化を、戦後日本の高度経済成長の源、官僚支配の出発点として捉える連続説をすでに打ち出していた。本書はこのような議論とどう関係しているのか。

連続説については、占領期の全面的な分析によって、総力戦を起源とみる説明が一定程度修

14 米谷匡史「津田左右吉・和辻哲郎の天皇論——象徴天皇制論」（網野善彦ほか編『岩波講座・天皇と王権を考える1 人類社会の中の天皇と王権』岩波書店、2002年）は、占領下における「日本国民」の大規模な再編成が日米合作で行われたことをダワーの本書を参照しつつ指摘するとともに、「日米合作の植民地主義」の問題を東アジアの冷戦の空間へと開こうと提言しており、示唆に富んでいる。

15 一連の「東アジアの冷戦と国家テロリズム」をめぐる同名の国際シンポジウムなどは、経験の共有と相互検証の代表的な試みである。私自身も含めて、日本の現代史研究者の多くがこうした場に参加してこなかった事実は、今後の知的交流にとって大きな問題を残している。こうしたなかで、たとえば森宣雄「東アジアのなかの沖縄の日本復帰運動——台湾・沖縄・韓国の脱冷戦・民主化運動」（『インパクション』103、1997年6月、特集：沖縄へ、そして沖縄から）のように、復帰運動を広く東アジアの民主化運動、脱植民地化の過程に位置づける提起もあり、「日本戦後史」の語り方は大きな揺さぶりを受けている。

正されていると見られる。総力戦による社会変化を重要な前提としつつも、官僚支配、組織された資本主義の育生、検閲によるメディアの編成にいたるまで、占領による屈折を経なければ戦後の形成に直結しないものは多い。こうした説明は、単に制度の連続／断絶にとどまらず、人々の行動の様式や感性の馴致されていくさままで視野に入れているために、より説得力ある段階的把握となっている。

ところが戦時期と占領期をつなぐ説明に比べて、占領期から占領後—戦後へと続く時代の把握については、不十分さと「言い過ぎ」を同時に感じる。

占領期は、あるときはやや無時間的に、いわば一幕ものの劇が行われる空間として描かれている。この傾向は本書の前半に顕著だが、特に第3部の社会運動や知識人の言動には、占領期の時間的変遷を軽視したまとめ方が少なからずある。「瞬間」「空間」という設定、また前半で描かれた世界が後半で封じ込められ変転するという構成をとる以上、このような語りにならざるを得ないのだろうか。

この結果、一方で、占領下の知識人や労働運動の評価が意外にステレオタイプに終わっている¹⁶。共産主義運動についても、それが当時

の知識人ばかりでなく、第2部に描かれた民衆のなかで（一部とはいえ少なからぬ数の人々によって）なぜ強く「抱きしめられた」のかを探るならば、「在日」の朝鮮人や沖縄人、あるいは東アジアに起こった「革命を抱きしめ」ようとした流れにつながり、前述の embracing の地政学も相対化されたのではないか。

知識人の動向については一部の著名な思想家以外には研究が進んでいないのは、一般的な傾向でダワーにのみ帰せられる批判ではない。今後、連続／断絶を言うにも、占領期の言動の検討が、知識人においてどのような意味で「戦中のシステムと戦後のシステムが締め金でつながっている」（下p.423）のかを探る試金石になるだろう¹⁷。他方、占領を稀有な瞬間として形象化したために、占領期を戦後の起源として書き込みすぎている。生活・文化→政治→経済という領域の推移を跡づけていく本書の叙法は、占領下の社会と支配的な政策基調を示しているのかもしれない。しかし、それがそのまま独立後の固有の意味での戦後日本を規定するわけではない。戦後の出発と戦後の形成は同じではないからだ。もちろんこの批判は空手形の

16 この両者を扱った第3部は、第2部の民衆の活写と並んで、実は日本の先行研究の参照がもっとも少ない。これはダワーの知的関係と関心の方向性のある種の限界を表しているとともに、日本における日本戦後史／占領史において、どのような点で蓄積がないのかを窺みとれる（参照文献における第2・3部と第4部との対照性）。それは特に広義の文化と社会秩序の関係をめぐる

研究で顕著だろう。また知識人については、90年代日本のいわゆる総力戦論の研究者が再検討にもっとも力を入れてきた分野（丸山真男・大塚久雄等）であるだけに、相違が目立つ。ダワーも第5部で田辺や南原について秀逸な分析を展開しているが、彼らと「悔恨共同体」との思想的関係などは追求されていない。
17 たとえば、戦間期から戦後にかけての日本の国際政治論の軌跡を思想的に丹念に解き明かしつつある酒井哲哉の一連の論稿でも、アジア太平洋戦争期に比べて、占領期を直接論じたものは少ない。参照、酒井哲哉『戦後思想と国際政治論の交錯——講話論争期を中心に』（日本国際政治学会編『国際政治117 安全保障の理論と政策』1998年3月）等。

ところがあって、本格的な 1950 年代論がない今日、ダワーへの疑問は私自身の課題でもある。いずれにせよダワーが断絶を強調している要素と連続を強調している箇所を細かく検討する必要がある、連続／断絶の議論は豊富化されつつも多くの点で議論の余地を残している。

3-3 性的隠喩と権力

2-3 で述べたように、ダワーは「抱擁」という性的隠喩を媒介として、さまざまな事象の背後にある権力関係を浮かびあがらせたが、この手法自体にも、「あいまいさ」の追求の点で不充分さが残る。性的隠喩自体はありふれたステレオタイプであり、そこからさらに、なぜ占領空間で権力作用を表現する特に重要かつ普遍的な技法になるのかについて分析しなければ、隠喩は文字通り記述上の隠喩にとどまってしまい、ステレオタイプを強化することにならないだろうか。

こうした危惧を感じるのが売春婦に関する記述である。ダワーは彼女たちの言動から、その主体性と社会への抵抗を読みとっているが、それはともすると称揚と読まれてしまう。embracing という現象を存在そのもので体現した彼女たちについての分析を、隠喩に回収するだけでなく、人種主義など多くの文脈と接合して分析を深める必要があるだろう。

「抱擁」という隠喩が、基本的には二者関係（この場合は日米）しか想定できない情景へと

読者の思考を固定化する効果を生むことにもくりかえし注意したい。embracing とは、単にセクシュアリティに関する示唆ばかりではなく、ダワーの占領史像を優れて本質的なところで表現する形象なのである。

また前述の写真や風刺画も、印象的なものが少なくないにもかかわらず、本文で十分な検討が加えられずに配されている。もちろん図像掲載の効果については、その位置も含めてダワーは明らかに自覚的である。けれども、その扱いは「示唆」にとどまり、それ自体を綿密に分析し、読解を提示しているわけではない。

こうした記述と図像の配置を追うにしたがい、cultural studies や postcolonial studies のような文化分析の新しい流れとの微妙な接点と、しかし大きなずれ違いとの両方に気がつく。ダワーが「あいまいさ」への嗜好を養った時点での「文化」の枠組は、日本研究のディシプリンと、その背後にある西洋を準拠にした人文学の規範に基づいていた。この背景が、ダワーの表象分析や隠喩の効果に対する感覚をどれだけ規制しているのか、詳らかにする用意は今の私にはない。しかし、ダワーが当初親しんだであろう文化交流史や異文化接触論の枠組が、表象と権力を結びつけて分析する著者の手さばきをおお不充分なものにとどめているように思われる。

3-4 誰が読者なのか

以上の批判はどこに焦点を結ぶだろうか。占領空間は、実質的には日米のさまざまなレベルの出会いとして対象化され、この二者関係に閉じられてしまっている。それは一方では、「内側から」という視角によって選択される当時の日本人の「声」が、敗戦と占領によって自閉化していったがゆえかもしれない。しかし他方で、日本人とは別様に敗戦と占領を抱きしめた人々がこの列島に当時存在していた事実を考えれば、この問題の一端は、ダワーが前提している〈戦後日米関係〉によって規定される思考の枠組自体にあると考えざるを得ない。

ただしこの批判は、ダワーの叙述に対してというよりは、読者の読み方に向けてこそ、発したい。ダワーは本書を、日本人という特殊な人々や孤絶した文化圏の話ではなく、人間の普遍的な側面を照らし出すものとして書いたという。英語による執筆・出版は、さしあたってこの意志に見合っていたといえるだろう。ただし、「日本の読者へ」を読めば、本書は何よりもダワーにとっての「私たち」「アメリカ人」に向けて書かれているとわかる。ダワーは、日本の占領空間に現れたダイナミズムを通して、やがてベトナム戦争へと続くアメリカの植民地主義的な行動を批判すると同時に、占領下の日本人に見られる普遍的な人間性を描くことで、日本を特殊とみるアメリカの日本観に挑戦を試みた。ここに、アメリカで「日本と日米関

係を研究する歴史家」が第一に果たそうとした課題がある。

もちろん、日本の自己イメージがアメリカの日本特殊性論と共犯関係にあると指摘する以上、こうしたダワーの問題意識は、日本の読者へ向けても効果的なメッセージとなるはずだ。しかし、本書が日本語版として現れたとき、(私も含めて) 読者はどうしても敗戦後の日本を、ダワーによっていわば祝福された「瞬間」として読んでしまう。この落差には何が隠されているのか。

「はじめに」で私は、「なぜ本書のような作品が日本で書かれなかったのか」との感嘆がはらむ錯誤を指摘した。そこには日本の内と外を前提とした上で、本来このような歴史は日本人が書くべきだ、という暗黙の了解が成立している。さらには、ダワーの描いた占領史像を、日本人が書くべきはずの作品なるものに安易に同一化してしまっていないだろうか。その場合、ダワー特有の問題意識と批判の対象を無視して、本書を通有の日本史の枠組に押し込めてしまい(占領史像の「日本化」)、ダワーの無意識の前提にある〈戦後日米関係〉の枠組まで無批判に受け入れてしまいかねない。

空間・時間、そして表象のそれぞれにおいて、ダワーとは異なる敗戦・占領の「抱きしめ方」を描く必要がある。それは、ダワーの「あいまいさ」への感受性をいっそう推し進め、私たちの無意識の前提となっている〈戦後日米関係〉

282 「あいまいさ」をいかに抱きしめるか

の枠組を歴史化・相対化する方向に求められるだろう。

そうした試みは、どのような読者に向けて開かれる叙述になるだろうか。本書がアメリカ人と日本人以外の読者にどのように受けとめられたかに注目してみればよい。たとえば原著刊行以来、本書の価値にいち早く注目し、第二次大戦後の東アジアの地域構造を支配する日米合作の冷戦政策を批判する際に、頻繁に参照を求めてきた日本語圏の「読者」が姜尚中である事実をどう考えたらよいのか。姜は、日米の幸福な物語に滑り落ちそうになる読者のうちで、本書の読解を批判的な方向に強く旋回させる、いわば異能の読者なのである。こうした読解の可能性はまだ始まったばかりだが、かつて『昭和史』が描いた戦争・占領・戦後の物語＝「国民」の物語という定式は、さまざまな読者の介入によって壊されようとしている。今後の占領史像は、そうした来るべき読者、あるいは潜在的な読者に自らを開く叙述を目指さなければならない。その可能性と示唆の一端もまた、本書が与えてくれている。

4. 〈戦後 - 日米 - 関係〉という問題領域

このように、本書を通読すると、なお「戦後日米関係史」という枠組のなかにある、あるいはその枠組を最大限に活用して成った叙述であると強く感じる。そこから設定できる課題は（特に日本「戦後史」研究を出発点としている

私には）、単にその克服を説くのではなく、そうした枠組の形成過程そのものをメタヒストリ的に読みこみ、多方面の研究者が検討可能な問題領域として再構成することである。もっとも、ここでその構想を全面的に論じる用意はない。必要最小限の分節化と問題提起で、責をはたしたい。

4.1 〈日米〉の〈戦後〉を歴史化する

前述の embracing の地政学は、戦後日本史を考察する際にも、自覚しなければならない不可視の枠組である。この問題は換言すれば、戦後日本社会のさまざまな争点に存在するアメリカの影を探り出すという課題につながるだろう。

一方で、アメリカの協力者として占領を生きのびた戦後日本の保守主義が、どのような構想のもとに成立していたかが、その心性にまでおりて分析されなければならない。1990年代に起こった政治改革論や保守の分裂などにもこの問題は響いている。占領を忘却し、対等な同盟関係を謳うことで正統性を確保しながら、憲法の「改正」、自主憲法の制定を訴えて絶えずアメリカによる占領の影を浮かびあがらせざるを得ないジレンマは、保守主義に亀裂を生んでいる。

国内冷戦のもう一方の当事者である左派勢力にとっても、アメリカの影は深刻な影響を及ぼしている。たとえば社会運動における暴力の

問題、あるいは資本主義に対抗する開発構想など、アメリカとの対峙を経験することで屈折したものは多い。困難を伴う作業だが、再考されなければならないのは、戦後左翼のなかのアメリカ問題ではなかろうか。

こうしたアメリカの影を日本社会の動態から見出していく試みは、吉見俊哉による戦後日本のアメリカニゼーションの分析などに顕著だが¹⁸、これに対しては従来の政治史や経済史の研究者も応えられる成果をかなり蓄えているのではないか。ダワーが占領軍の姿勢を表現した「新植民地主義」という概念も、従来の一国的な叙述を批判的に読み直すなかであらためて定位する必要がある。

抑圧されたアメリカの影を捉える作業は、広範囲に及ぶだろう。戦時期の座談会「近代の超克」において超克の対称となる西洋文明の事例が、ほぼすべてヨーロッパに求められていたように、アメリカは圧倒的な力を持つがゆえにかえって対象化されず、意識下に抑圧された。戦後の社会科学においても政治的立場を越えてこの傾向は強いように思われる。アメリカの近代化論に対抗するために、日本では東アジア論などの学問的深化を遂げたが、その過程で「アジア」を捉える視角はかえって固定化されてし

まったのではないか。

もっとも、アメリカの影の強調は、「日米」という枠組をなぞり、かえってそれを強化しかねない。そもそも占領以前には、国際関係において「日米関係」を重要視する認識は、決して自明ではなかった一事を考えても、〈日米関係〉という枠組の歴史化、相対化が不可欠だろう。

4.2 〈関係〉を編み直す

ではその〈関係〉をどう描き直せるだろうか。ここでは学問的な知の生産に関する論点を中心に、いくつかの提案を素描してみよう。

日米の知的交流については、当事者の回想や政治学などの分野での概括などが行われてきた¹⁹。だが、その多くは各研究者やプロジェクトの軌跡を追うにとどまり、一部の交流にまとめられがちだった。こうした現状に対して、「アイデンティティの持つ表象的位相と、不平等や搾取といった物質的位相の交差部を再探究する試み」²⁰とのテッサ・モーリス＝スズキの示唆にならえば、日米知的交流の政治経済学とでもいべき研究が必要になっているのだろう。60年代の近代化論の喧伝やアメリカからの資金援助（あるいは80年代からのアメリカの日本研究に対する日本からの資金援助）について

18 吉見の関連論稿は多いが、さしあたり吉見俊哉「『アメリカ』を欲望／忘却する戦後——「基地」と「消費」の戦後をめぐる」(前掲『現代思想』29-9)を参照。アメリカの影については、戦後文学研究が積極的に対象化してきた。もちろん今日では、その代表的な論者である江藤淳や加藤典洋も、その影のもとにあったことを考慮しなくてはならない。

19 石田雄『社会科学再考——敗戦から半世紀の同時代史』(東京大学出版会、1995年)。

20 テッサ・モーリス＝スズキ『批判的想像力の危機』(同『批判的想像力のために——グローバル化時代の日本』平凡社、2002年) pp.58-59。

は、これまでも指摘されてきたが、それらはイデオロギー政策の一環として整理されるにとどまっている。イデオロギー論の再版ではなく、交流にかかわって、もの・カネ・ひと・情報・表象がもつ様々な力の交錯としてその全貌を押さえる視点が求められている。この可能性の重点のひとつが、戦争が生んだ知の兵器、「地域研究」であろう。日本学・日本研究に限らず、アメリカの地域研究が第二次大戦時の占領計画立案や冷戦下の対発展途上国政策のための科学として形成された経緯は良く知られているが、そのために動員された領域がどの程度のものなのか、基礎的な人間関係の水準さえ、いまだ不明な点が多い²¹。

研究の糸口は、たとえば歴史研究のもっともなじみ深い手法である個人史から出発することもできる。近年、日本研究の政治性やその背後にある人種主義をめぐる、エドウィン・O・ライシャワー（1910-90年）の戦時期の政策提言が注目を集めているが²²、宣教師の息子としての日本での出生（彼らは BIJ [Born in

Japan] と呼ばれた）と彼の愛国主義との関係、ハーバード大学在任時から駐日大使期にわたる様々な宣伝・研究プロジェクトの立案・運営等々のライフヒストリーを追い、総合的な叙述を目指すならば、日米知的交流の政治経済学の一端が浮かびあがるだろう。

問題はアメリカの側だけではない。保守的な文化主義による日本文化論の絶え間ない生産が、欧米の日本研究との共犯関係によってなりたっているとの指摘はいままでもないが、ではこれに対抗してきた批判的な学問生産は、こうした動向とどのような構造的関係をもってきたのだろうか。近年、アメリカの日本研究の積極的な紹介が行われつつある²³。しかしまだ紹介の段階であり、アメリカの日本研究との（敵対も含めた）関係を繰り込んだ史学史や学問史は書かれていない。特に「史学史」は一国的傾向が強いが、「日本史学史」はダワーの研究をどう位置づけるのだろうか。ここに、従来の史学史が直面している臨界点が明らかになっているだろう²⁴。

以上の研究の可能性も、それ自体が日米の関係の深さ、親密さを実定的に固定化する作用を

21 地域研究や日本研究の政治性とその影響力、歴史的意義などについては、以下を参照。H. ハルトゥニアン、酒井直樹「(対談) 日本研究と文化研究」『思想』877、1997年7月）、H.D. ハルトゥニアン「曖昧なシルエット——イデオロギー、知、そして米国における日本学の形成」『みすず』446・448・449、1998年5・7・8月）、樹本健「資本主義の時間性と日常性の不穏——Harry Harootunian, *History's Disquiet* における歴史への問い」『Quadrante』4、2002年、東京外国語大学海外事情研究所、富山一郎『暴力の予感——伊波普猷における危機の問題』(岩波書店、2002年) 終章。

22 タカシ・フジタニ「ライシャワー元米国大使の傀儡天皇制構想」『世界』672、2000年3月）、酒井直樹「共感の共同体と空間の実践系——東アジアにおけるアメリカ合州国の存在をめぐる」(前掲『現代思想』29)9。

23 成田龍一『歴史学のスタイル——史学史とその周辺』(校倉書房、2001年)、前掲岡部政夫「最近のアメリカでの日本現代史研究」、中村政則「現代歴史学の課題——アメリカの日本近現代史研究(1980-2000年)」(前掲『年報・日本現代史8』)、同「アメリカの日本研究と歴史叙述」(『神奈川大学評論』42、2002年7月)。

24 今後、史学史などの学問史は国民国家の単位を越えて、多様な比較や思いがけない連関と接合の可能性を見出す記述が試されていくだろう。「戦後歴史学」の歴史的位置づけも、そのようななかで再検討されるはずだ。

果たしてしまうならば、知の支配構造の再生産に貢献するだけとなる。知の生産にかかわっても、〈日米関係〉の頑強さを見据えつつ、それを越える視座が求められる。ここで注意すべきなのは、日本における日本に関する言及（たとえば日本史）とアメリカにおける日本史研究とを比べた場合、各々の位置付けは非対称だということだ。アメリカの日本研究は、アジア研究の一環として存在しており、これと対称の位置にあるのは、日本ではむしろ日本のアジア研究でなければならない。日本のアジア研究、アメリカのアジア研究、互いの変遷と交錯が、政策科学としての「地域研究」からそれに批判的な知の運動までを含めて考察されるときに、かえって〈日米関係〉の制約が明るみに出るのではないか²⁵。

鶴見良行（1926－94年）は、こうした課題を探ろうとするとき、もっとも重要な人物だろう。ライシャワーと反対に米国で外交官の子として生まれた鶴見は、知米派の知識人として出発しながら、やがて70年代には従来の政治経済学的なアジア研究者とは異なるアジア学を生み出した。この点で、鶴見は明らかにダワーの同時代人である（ダワーと鶴見では、ちょうど

一回り鶴見が年長だ）。ベトナム戦争の衝撃を契機として、太平洋のこちら側と向こう側で、それぞれがアジアへの向き合い方を問い直し、「内なるアメリカ」の克服を目指した。〈日米関係〉の制約を克服する試みは、こうした複数の流れをひとつの視野に収める工夫を通じても進められるはずだ²⁶。

一国単位の学問史や知識社会史を越える要請は、なにもいまに始まったことではない。むしろその要請は、「地域研究」という知の形態自体が招き寄せてしまったともいえる。『敗北を抱きしめて』では、著者の知的系譜を考えるにあたっても重要なオーエン・ラティモアやハーバート・ノーマンが、旧世代の知日派とは対極的な世界観をもつ人々として描かれている。彼らはオリエンタリズムに貫かれた日本・アジア認識を覆し、現地の研究者・知識人とも対等に接触して旺盛に学び、普遍的な人間理解がアジアにおいても妥当すると主張した。また彼らに応じたアジアの知識人たちも、単に欧米から学問や技術を摂取するのではなく、戦争と革命の時代にあって、自分たちに必要な学問の創造を模索した²⁷。ここには、ある中心からの影響

25 たとえば山室信一「空間アジアをめぐる認識の拡張と変容」（山室ほか編『アジア新世紀1 空間——アジアへの問い』岩波書店、2002年）は、欧米における東洋学・地域研究と、近現代日本のアジア研究の軌跡を明快に整理しているが、欧米と日本の軌跡が並置されるにとどまり、両者の関係を具体的に問うてはいない。また戦後日本のアジア研究は「調査研究」と呼称され、学会・研究機構などに焦点が絞られているため、後述の鶴見良行への言及はない。

26 参照、鶴見良行『東南アジアを知る——私の方法』（岩波書店〔岩波新書〕、1995年）。その冒頭では、知米派知識人がアジア学の樹立へと展開／出立していく軌跡が回想されている。また完結に近い『鶴見良行著作集』全12巻（みすず書房）のうち、本稿の関心にとって特に重要なのは第1巻『出発』（1999年）、第2巻『ベ平連』、第3巻『アジアとの出会い』（ともに2002年）に収められた1960～70年代の彼の時事評論である。第3巻解説・鹿野政直「ベトナム反戦からアジア学へ」は、出色の鶴見論だと思う。

27 油井大三郎『未完の占領改革——アメリカ知識人と捨てら

286 「あいまいさ」をいかに抱きしめるか

関係で捉えられる系統樹のような学問史の分析は適用できない²⁸。日米間の知的交流をもその一部とし、かつその二者関係の想定が解体せざるを得ないような 20 世紀アジア太平洋レベルの知の接合・領有・交渉の諸相が、やがて記述されなければならないだろう。叙述の起点はアメリカや日本である必要もない。帝国のグローバリズムと革命のグローバリズムの折り重なる時代に、東アジアにおいて果たした知識人の行動と役割を考える際には、「無名」の活動家一人一人がその起点になる可能性がある。

おわりに

『敗北を抱きしめて』——それがもつ議論を喚起する力によって、ついには随分大仰なことまで述べてしまった。しかしながら本書が読まれる状況と、そこで行われる読みは、日米関係の変化に連動するものである以上、今後も点検作業は不可欠だろう。本稿の前提となる報告から 1 年近くが経とうとする今日では、本書への評価には若干の変化も見られる。最後に、本書を「抱きしめる」ための条件が、いまどのような地点にあるのかを確認しよう。

冒頭で、私は「なぜ本書のような作品が日本で書かれなかったのか」との感嘆には、ある種

の錯誤が含まれていると指摘し、本論ではその問題性を少し詳しく述べた。だが、そうした作業の上でならば、この問いは問いとしては一定の意味がある。そう考えるのは、1930 年代生まれの著者のような世代の研究の集大成が、日本ではどのように著され、世代的に継承されるのかを考えたとき、彼我の状況にはずいぶん大きな差異があると感じるからだ。もちろんすでに述べたように、ダワーは彼らの教え子たちである〈CCAS ジュニア〉ともいべき世代が続々と研究を発表し、「ポストモダニズム以後の歴史学」を実践している状況に対しては、微妙な関係にある。けれども 90 年代の日本の知的状況を考えるならば、60 年代の価値ある異論派の伝統がこのような作品となって結実し得る環境が存在することは、「なぜ書かれなかったのか」との問いに照らし出される日本の知的状況の 30 余年を顧みるとき、精彩を放っている。

しかし、本書がアメリカで著されたときから、この知的状況は大きな変化を被りつつある。日米いずれでも、知識人の発言はいま大きな屈折を経験し、メディアは人々から沈黙と観察の機会さえ奪おうとしている。その状況についてここでいちいちふれる必要はあるまい。ただ問題はここでもつながっていて、日米のさまざまな場で新たな embracing が進みつつある。「9.11」以後の日米「同盟」関係、とりわけ日本外交のアメリカ追従の方針は、それをあからさまに示す。しかも、この embracing は、それに異を唱

れた日本民主化構想』（東京大学出版会、1989 年）は、今後の研究の出発点を提供してくれる。

28 山室信一『思想課題としてのアジア——基軸・連鎖・投企』（岩波書店、2001 年）は、その志向や展望において、なお日本を中核に位置づけている議論ではあるものの、視野の広さと魅力的な概念の造形によって、東アジアの知識人と近代を考えるにあたり避けて通れない業績となっている。

える者をつぶそうとする、新しい抑圧の形式を生み出している。

米軍によるイラク攻撃が現実の日程に上るなかで、日本占領の経験は新しい意味をもってアメリカで捉えられるようになった。イラクとの戦闘後を想定して作成されつつある現地占領の計画に際し、成功のモデルとして日本占領が想起されたからである。実は、本書は、内容の豊富さゆえに、読者が恣意的に抽出するならば、いくらでもそのモデルのコツを提供してくれるだろうと私には思える。しかし著者がこれを許すはずはない。ダワーは、イラク占領のモデルとして日本占領を捉える意見に具体的に反論し、占領の初期条件が全く異なっていると批判している²⁹。

ところが、このダワーの論説が日本で紹介されると同時期に、彼に対する中傷が行われた。本書に賞を与えたはずの朝日新聞社の週刊誌が批判記事を書いたのも異例だが、それ以上に重要なのは、その批判のレトリックである。本書が引用した写真資料の間違いを指摘することから始まり、はてはそれを根拠としてベトナム反戦世代といわれる著者ダワーの人権感覚が疑われ、あるいは女性差別・人権侵害ではないかと指摘をエスカレートさせる。さらに訂正の仕方をめぐっては版元の岩波書店を不誠実

と断定し、「著名な米国人学者の権威にだまされたことになる」とまで述べている³⁰。この批判は、一箇所の史料批判の詰めの甘さ（それ自体は重大な反省を必要とするが）を捉えて、著者の人格まで否定するもので、いわゆる「新しい歴史教科書をつくる会」周辺の「研究者」や評論家が、敵対する論者を貶めるのに使う論法に酷似している。しかも記事は、それまで本書を日本で評価する際にはほとんど言及されなかった「ベトナム反戦世代」という著者の経歴をことさら貶めるように筆を進める。

ダワーによる米国政府批判と、日本の新たなダワー批判における「ベトナム反戦世代」叩きとは、具体的な対応関係は認められない。しかし、米国のイラク攻撃への反対を封じるようにも作用する記事が、ナショナリストの論法と酷似したレトリックで現れたことから、ひとつの連関が読みとれる。日米の *embracing* が、いまやそれぞれ一国内部での抑圧にとどまらず、グローバルな修正主義となってさまざまなメディアを通じて駆使されているのだ。

厄介な事態はこれだけではない。日米合作の抑圧の構造は、それに反対する者の論理をも拘束する。ダワーは前述したイラク占領計画への批判の中で、イラク占領が失敗する必然性を挙証するうちに、日本占領はそれとは対照的な条

29 ジョン・W・ダワー「イラク占領計画は歴史を無視している——米国の日本占領からの教訓」（三浦陽一訳、『世界』709、2003年1月）。原文は *New York Times* の2002年10月27日付に掲載された。

30 「誠意問われる歴史家と岩波——「生体解剖」「人肉試食」をめぐる虚偽と対応」（『AERA』789、2002年12月23日）pp.34-35。文責は同誌編集部・長谷川照とある。

288 「あいまいさ」をいかに抱きしめるか

件を持っていたがゆえに「成功」したのだと書いてしまっている。もちろんその意図は、「成功」の条件としての戦前日本の「民主主義の強力な伝統」などを指摘するためなのだが、「日本占領は、ほとんどあらゆる基準からみて、注目すべき成功例であった」と応じてしまうことには違和感を禁じ得ない³¹。成功といい、失敗といい、それはいったい誰にとっての評定なのか。厳しい政治的緊張のなかでは、本書でこだわっていた「あいまいさ」は、たやすく削ぎ落とされてしまう。〈戦後日米関係〉の構造から抜け出すためにはどれほどの困難がつきまとうか——ダワーは、その点も身をもって示しているといえるだろう。

では、「9.11」以後の日米間の昂進する、あるいは新たな段階に入った embracing に抗するために、私たち (plurals) はどのような対抗的な結びつきが可能なのか。ダワーが本書で打ち出した豊かな構想力と「あいまいさ」への優れた感受性を批判的に継承し、新たなつながり方の創出へと本書を活かす可能性は、ひとえに私たち読者（その構成員自体が読み方にかかっているような共同性としての読者）による「読み」の開き方にかかっている。

いままた新しい「占領」が欲望され、そのモデルとして日本占領の経験が「成功」した先例として語られようとしている。しかもその占領

への支援と後方での参加を期待されているのが、ほかならぬかつて占領された日本であるという。この悪夢のような循環に対し、私たちはどのような敗戦経験と占領経験の歴史像を対置できるだろうか。そして、それはいったいどんな読者を待ち望む書物として著し得るだろうか。

【付記】 本稿は2002年4月27日にWorkshop in Critical Theories (WINC)・歴史学研究会近代史部会の共催により、東京外国語大学海外事情研究所にて行われた『敗北を抱きしめて』合評会での報告をもとにしている。主催者ならびに同席させていただいた中村政則さん・油井大三元さんのお二人の報告者、そして参加者の皆さんに、記して感謝したい。なお、報告後、本稿執筆までに私の報告内容と一部重なる指摘が公になっているが、合評会時点の記録として報告時の意図をほぼそのまま原稿化したことを御了解いただきたい。ただし、「おわりに」などいくつかの箇所、参考文献を増補し、報告後の社会状況やメディアの論調の変化について加筆した。

（とべ ひであき・早稲田大学大学院）

31 前掲ジョン・W・ダワー「イラク占領計画は歴史を無視している」。